

巻頭言

さまざまなテーマにもとづく研究が行われ、この度、宮城大学研究ジャーナル3巻1号が発刊された。学問の領域は、社会の変革や新しい技術の導入などの過去の変遷を通じて、その境界を拡張してきた。従来のカテゴリーや専門分野の枠組みを超え、新たな領域が生まれ、古いものと統合される過程で、学問の専門分野は多様化の一途を辿っている。この変革の中で、学際的な研究の必要性は一層明らかとなってきた。各分野が単独で取り組む問題ではなく、異なる領域が連携し、複合的な視点からのアプローチが求められる現代。そこには、新たな可能性と、未知の発見が待ち構えている。

宮城大学は1997年に開学し、宮城県の歴史と伝統を背景に、時代の要請に応えるべく、学問の深化と社会的な貢献を追求してきた。東日本大震災をはじめとする社会的な課題への取り組みや、国際的な研究テーマへの取り組みは、研究活動において、重要な関心事の一つである。即ち、普遍的な知見を示すとともに、地域と連携し、その問題解決に貢献するための方策の検証も研究者として示唆してきた。

現代を「情報の時代」と称するならば、情報の正確さやその適切な利用は、しばしば社会で問題となる。正確な情報の取り扱いや適切な情報利用や発信については研究者もその使命としての責任を負っている。近年見られるオープンサイエンスの潮流は、科学的知見を公開し、共有することの重要性を示している。更には、COVID-19パンデミックの影響で、その重要性が一層際立ってきた。情報が瞬時に拡散される時代に、真実の探究とその正確な普及を目指す姿勢は、我々研究者にとって変わらぬ道しるべである。

宮城大学研究ジャーナルは、現代の「不確実性(uncertainty)」の中でも、研究者たちの持続的な努力の成果を収録し、公開していくであろう。私たちの研究成果が、未来のある時点での社会的課題の解決に繋がることを信じている。それらの研究結果がいつどこでどのように社会の役に立つかを予測することは難しく、多くの変数が影響を及ぼす。しかしながら、学問の役割は、予測不可能な変化とともに未来へ向けてその可能性を広げていくことでもある。学際的な視点、新たな挑戦、そして伝統的な方法論を組み合わせ、未来に向けての知的探求を研究者は続けていくであろう。

宮城大学研究ジャーナルを手にとったすべての読者に、新たな知識と発見の喜びを感じていただきたいと願っている。また、このジャーナルが研究者同士、あるいは研究者と読者との間で新たな対話や協働の場を生み出すことができれば、なお素晴らしい。宮城大学研究ジャーナルのご高覧、心より感謝申し上げます。

(宮城大学研究ジャーナル3巻1号編集委員長 糟谷昌志)